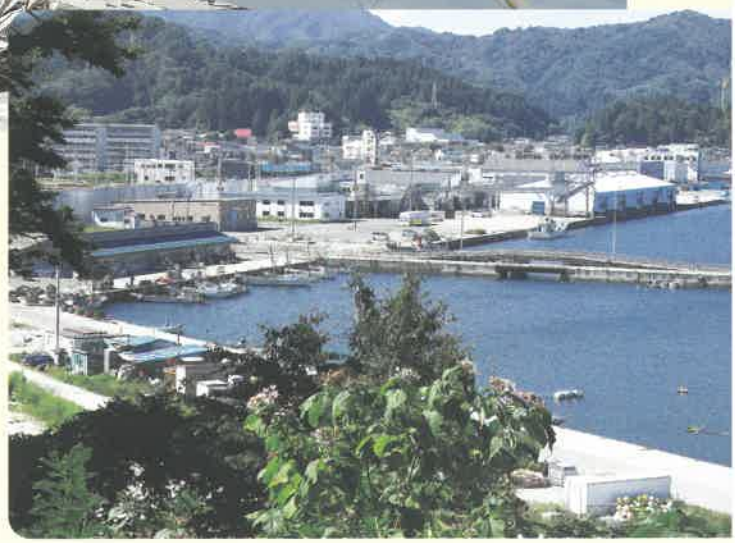
住みよい町

復興から未来へ



伝作鼻から見た山田地区。東日本大震災直後(上)と、2020(令和2)年8月(右)

山田町教育委員会

3・11

2011(平成23)年3月11日14時46分、東日本大震災をもたらすマグニチュード9.0の東北地方太平洋沖地震が発生。ゆれは長く激しいもので、山田町では大沢地区で最大震度5強を記録しました。

田代さん

地震直後、船越湾を見ていたのが、当時船越小学校の校務員だった田代修三さんです。大津波の経験があった明治生まれの父親から「津波が来たらとにかく1メートルでも高い所へ雑草をつかんでも蔓をつかんでも逃げろ」と教えられてきた田代さんは、海面が盛り上がるのを見て、小学校に戻り「津波が堤防を越える。ここにいては危ない」と校長に訴えました。校庭に避難していた136人の子どもたちは助け合いながら山に登り、間一髪で津波から逃れたのです。

津波は、浦の浜と前須賀を3往復しました。

津波は15時22分ころ、まず小谷鳥海岸、船越湾沿岸に、そして山田湾に到達しました。船越地区では船越湾からの津波と山田湾からの津波が衝突、織笠地区では織笠川に沿って最長約2キロメートル津波が遡上しました。

十二神山の航空自衛隊山田分屯基地では、15時48分に町役場に到着した隊員からの報告を受け、16時5分に基地司令の判断で災害派遣を開始しました。隊員のうち約4分の1は被災し、家族や財産をなくした隊員もいましたが、他部隊の到着までは基地の隊員のみで人命救助、捜索活動、消火活動、支援物資の輸送などの災害派遣任務にあたりました。

山田地区、田の浜地区、大沢地区、織笠地区では津波火災が発生、山田地区では市街地が広範囲に焼失し、田の浜地区では住宅のほか、牛転峠付近まで1平方キロメートル以上の山林が延焼しました。

阿部さん

山田町社会福祉協議会総務課長(2017〔平成29〕年当時)の阿部寛之さんは「2～3週間は情報整理と拠点づくりで手一杯だった」と振り返ります。避難生活は過酷なもので、お年寄りや障害のある人には特に支援が必要でした。

阿部さんはボランティアセンターの立ち上げに携わります。4月9日に設置されたボランティアセンターを通じ、2011(平成23)年度末までだけで延べ24,449人のボランティアに、山田町のため活動していただきました。困っている人のために何かしたいという気持ちがあれば「大人でも子どもでも必ずできることがある」と阿部さんは言います。

光をさがして

すべてが変わったあの日
「普通」が無くなったあの日
一瞬で
今までの思い出も
大切な物も人も
すべてをうばいさったあのトキ
みんなが居て
あたりまえだった毎日が
目の前から消えた
長い長い一夜
お腹をすかせ
寒さに耐えた一夜
忘れたくても
忘れられない
光の見えない日々
外に出てまわりを見渡しても
光はどこにもなかった
そしてふと気がつく
光が無ければ
自分たちで光をつくればいいと
本当は
すぐ近くにあったのかもしれない
それぞれが持っている
心の光
笑顔の光

(震災当時の山田の中学生の詩)

これからを考えるためにも、何が起きたかを忘れないようにしないとね。

豊さん

ＪＲ山田線(今の三陸鉄道リアス線)は線路や駅が流失、国道45号をはじめとする道路は寸断され、町内全域で停電、電話は不通、上水道はほぼ全域で、下水道は全域で止まりました。町内の家屋の約半分にあたる3,369棟が被災(うち2,762棟が全壊)。3,000人以上の人びとが避難所での生活を余儀なくされました。

湊さん

有限会社カットインみなと代表取締役の湊正美さんは目をみはりました。震災から数日後、やっと自分の理美容店にたどりついてみると、津波で廃墟と化した店の中にハサミやカミソリなどの道具が残されていたのです。湊さんは避難所に道具を持ち帰り、ほかの理美容師の協力を得て避難所の人たちに整髪などの理容サービスを提供し始めました。

「髪を切ることはその人の環境を変えること。環境が変われば心もリフレッシュできる」と湊さん。髪を切った人だけでなく、道具を持った理美容師も生きる気力を取り戻しました。湊さんは「『人でなければ人を癒せない』ということを再発見した」と語ります。

町内の死者・行方不明者の合計は825人。当時の町の人口の4パーセント強にあたります。

石川さん

釜石警察署長(2017〔平成29〕年当時)の石川康さんは、震災後の5月から翌年の3月まで山田交番の所長でした。行方不明者の捜索・遺体収容の光景を今でも思い出すといいます。「警察だけでなく消防署、消防団、自衛隊、そしてさまざまな応援部隊の方がたが、それこそ自分の家族を探すように捜索にあたった」と石川さん。

石川さんが子どもたちに伝えたいのは「地震のとき、ちゃんと避難して生きのこってほしい。そして互いに連絡をつける方法を家族で話し合っておいてほしい」ということです。

岩田さん

現在、静岡大学防災総合センター特任教授である岩田孝仁さんが静岡県被災者対策本部の派遣第1陣隊長として山田町に入ったのは、震災から2週間後。「自分も被災している町の職員が避難所や物資拠点、遺体安置所などで食事や睡眠時間までけずって働いていた」と岩田さん。職員を本来の職場にもどし、震災によって発生した業務を進めていくため、同派遣隊は行政事務支援を行いました。

岩田さんは、伝承の大切さを訴えます。津波の教訓を刻んだ碑がたくさんあるのに、被害は防げませんでした。一方で、江戸時代につくられた御蔵山は、一時避難場所として機能しました。「今の子どもたちが自分の孫に伝えられるようにする。山田町の人びとにはその責任があります」と岩田さんは言います。

（前略）校庭から体育館に避難しました。町の人たちも避難してきました。余震も続いていてとてもこわかったし、3月だったのでまだとても寒かったです。だから一枚の毛布をみんなでかけてちょっとでも温かくなるように身体をよせあっていました。しかし、お年寄りの方々もたくさんいて毛布などが足りなくなりました。だからわたしたちは自分たちの制服などをかけて温まりました。自分たちだけじゃない、みんな一緒なんだと思いました。（後略）

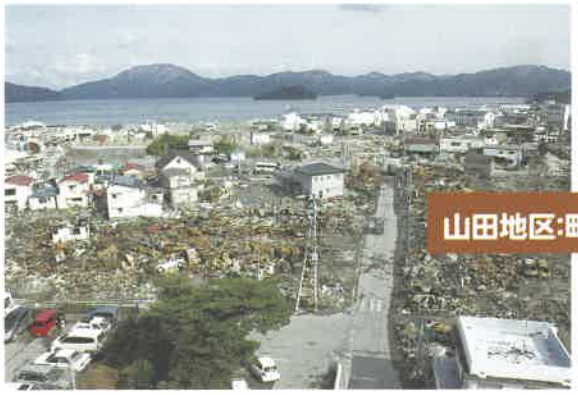
（震災当時の山田の中学生の作文から）

各所で堤防が破損・流失しました。

※被災についての統計は町発表の「3.11東日本大震災 山田町被害概要（2018〔平成30〕年2月7日15時発表）による。

被災直後から2020（令和2）年8月まで

山田地区:長崎街道踏切



山田地区:町役場屋上から①

山田地区:町役場屋上から②

山田地区:陸中山田駅

そしてこれから

これからどんな町にしていくか、みんなで考えないとね。

織笠地区:織笠第2団地

山田さん一家

船越地区:鯨と海の科学館

大浦地区:大浦漁港

守るという力

君はまだ　守るという
本当の意味をしらない
それは、
自分の命がつきてしまうことがあっても
誰かを守りたい　助けたい
それが守るという本当の意味だ
そのいっしんで　僕は強くなりたい
と誓ったんだ
君が僕の前からきえる
なぜあのとき守ってやんなかったと
後悔するのはいやなんだ
だから
僕の命にかけても　君も守ってみせる
それが守るという力の本当の意味だ

（震災当時の山田の中学生の詩）

（前略）がれきの片付けも進まず、津波や火事によって何もなくなったところに草が芽吹いていた。火災があった家の近くに花が咲いていて私はびっくりした。花や草は津波や火災があった中でも一生懸命生きている。私はその場所をみて感激した。空にむかってのびのびとがんばって生きている。土の中で根づいていたのだ。（後略）

（震災当時の山田の中学生の作文から）

これからも碧い海とともに

大沢小学校『海よ光れ』

大沢小学校（2020〔令和2〕年4月より山田小学校に統合）の全校表現劇『海よ光れ』第30回公演（2017〔平成29〕年）のようすです。太古から現代まで、たがいに向かいあってきた人びとと海を描いています。

山田町で暮らすためには「碧い海とともにあること」がどうしても欠かせません。

76歳の辰治郎じいさんが山田の海について孫に語ることから物語が始まります。

昔の大沢がいきいきと描かれます。

明治の大津波のシーンもあります。

メインの役は5・6年生がつとめますが、低学年の子どもにもたいせつな役割があります。

辰治郎役をやった 福士俊輔さんのお話

『海よ光れ』をやって、昔の大沢のことや、昔の人のことがわかったと思います。明治の大津波でたくさん人が亡くなるのですが、昔の人はあきらめませんでした。その気持ちが伝わってくるような気がします。

船頭役をやった 福士颯さんのお話

『海よ光れ』のための校外学習でスルメ割りをやって、海やそこでとれるものがさらに身近になりました。船頭の役は、今、船に乗っている人を元気づけられるようにと考えながらやりました。

学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業
平成30年３月発行